

# 下川晋平写真集 NeonCalligraphy

2021年に34歳で夭逝した写真家・下川晋平の作品集「Neon Calligraphy」をTCP PRESSから出版します（発売：ふげん社）。1989年長野県生まれの下川は、慶應義塾大学総合政策学部でイスラム文化を学んだ後、2011年には東京総合写真専門学校に入学、その後東京藝術大学院美術研究科先端芸術表現専攻で現代美術を学びました。イランの都市の商店のネオンサインにカメラを向けたシリーズで、生前の2020年にニコンサロンで発表された作品。本書には写真評論家の飯沢耕太郎氏、木村伊兵衛賞写真作家の都築響一氏、作者の師であるイスラム文化研究者の奥田敦氏のテキストを収録しています。



◆イスラム世界では、書(カリグラフィ)は特別な意味を持っている。書家は神の言葉を可視化する「靈魂の幾何学」を実践する者として尊敬を集めているのだ。

—— 飯沢耕太郎(写真評論家)

◆夜の闇にボツと光る、流れるような文字のネオン。そのあかりの束のなかにたずむ男たち女たち。その光の言葉は、なんだか神の走り書きのようにも見えてくるし、ぜんぜん僕には読めないのに、なんともいえない「情」が滲んでいるようでもある。

—— 都築 響一(写真家)

◆ネオンカリグラフィー。それを観るべき「画」として捉えれば、アッラーの創造の偉大さが、そして、読むべき「書」として捉えれば、人間の弛まぬ日常と生命力が見えてくる。

—— 奥田 敦(イスラム文化研究家)

イスラム圏であるペルシアでは伝統的に書道文化が発展してきたが、現在ではその一端を町に灯るネオンにも見出すことができる。ネオンの看板屋が並ぶ通りでは各店がその腕を競い合うように“書”を発光させている。

イスラムにおいて書は「靈魂の幾何学」である、見えない神的生成の流れを筆を通じて「見えるもの」へと結晶化させたものであると言われる。

さらに、ある中世ペルシアのスーフィーによると“至高の筆”は光そのものであるという。つまり眼によって知覚しうるもの全てが(神による)カリグラフィーということだ。ここにおいて世界は神的な筆による“photo”「光」「graph」「描かれたもの」の不断の運動というビジョンが到来する。

闇夜を疾駆する光の筆の運動。それは闇を引き裂き、神的生成の光子を放電させる、速度であり、線分であり、痕跡の結晶なのである。(作家ステートメントより)



## 下川晋平写真集『Neon Calligraphy』

定価：3,850円（本体3,500円+税）

発行人：伊奈英次  
発行：東京総合写真専門学校出版局  
発売：ふげん社

テキスト：飯沢耕太郎、都築響一、奥田敦

監修(アラビア文字関連)：奥田敦  
翻訳：ララビー・ハート/協力：下川家一同  
編集・デザイン：岡田奈緒子・小林功二(LampLighters Label)  
印刷・製本：渡辺美術印刷株式会社

判型：216×303mm / 装丁：上製本  
ページ数：64ページ / 部数：500部

2023年1月1日発行  
ISBN 978-4-908955-20-4

▶ご注文はツバメ出版流通まで FAX：03-3721-1922

TEL：03-6715-6121  
mail：info@tsubamebook.com http://tsubamebook.com

貴店名(番線印)  ご担当： 様	発行：東京総合写真専門学校出版局 発売：ふげん社	返品条件付注文扱い 返品了解 ツバメ出版流通：川人
	注文数	下川晋平写真集『Neon Calligraphy』 ISBN 978-4-908955-20-4 C0072 定価：3,850円(本体3,500円+税10%)